「広島お好み焼き隊」が被災三県を訪問

本場の味で元気付けられたら

2012年10月7～17日、生協ひろしまは福島県、宮城県、岩手県に「広島お好み焼き隊」を派遣しました。10泊11日におよぶ支援活動です。10月7日にお好み焼きの機材を積んだトラックで広島を出発。埼玉県で1泊したあと、8日の午前中に福島県郡山市へ到着しました。その日の午後から大玉仮設住宅で活動をスタート、翌日から福島市、名取市、東松山市、仙台市若林区、岩手県釜石市、大槌町をめぐって広島に戻るという行程です。派遣ボランティアは、第1陣、第2陣、第3陣と3つのグループが入れ替わりで担当。各陣ともに役員1人、理事・ブロック長1人、焼き手職員3人、事務局1人の計6人で構成されています。

10月9日、福島市で活動中の「広島お好み焼き隊」を訪ねました。午前中は飯館村の方々が避難する「松川第二仮設住宅」、午後は双葉町の方々が暮らす「北幹線第二仮設住宅」を訪問します。

集会所のそばに、鉄板でお好み焼きを作っている「広島お好み焼き隊」の方々がいました。事前にお多福グループ株式会社で焼き方の講習を受けてきたので慣れた手つきです。

「広島お好み焼き隊」事務局の生協ひろしま　総合企画室　組合員活動グループ　担当課長の福島守（ふくしま・まもる）さんは、「東北の人たちにとって広島のお好み焼きはなじみが薄いと思います。そこで、本場の味をお届けして少しでも元気になってもらいたい、という思いがあります」と今回の趣旨を語ります。

鉄板で焼いたアツアツのお好み焼きを受け取った皆さんは、「初めて食べたけどおいしいですね」とおっしゃっていました。「松川第二仮設住宅」にお住まいで管理人も務めている佐藤美喜子（さとう・みきこ）さんは、「できたてのお好み焼きをいただけるなんて本当にありがたいです。仮設住宅は狭くて匂いがこもるから、焼き物や揚げ物はあまりできないんですね。住民全員が同じものを食べるという機会も貴重です」と語ってくれました。佐藤さん自身も震災前から生協の組合員。コープふくしまから「広島お好み焼き隊」の受け入れを打診され快諾しました。

コープふくしまの理事たちも、
「広島お好み焼き隊」から焼き方のコツを教わり挑戦。
生地の粉やソースはお多福グループ（株）からの提供。

コーディネート役を務めたコープふくしま　生活文化グループ　組合員活動課長の酒井孝子（さかい・たかこ）さんは、「楽しみがあって出会いにつながるイベントなら大歓迎です。福島さんとお会いしたのは昨日が初めてですが、メールと電話で連絡を取り合い、円滑なコミュニケーションを心掛けました」とにこやかに話してくれました。

あらためて感じた組織と理念のつながり

そもそものきっかけは、なんらかの形で、広島らしい被災地への支援をしたいという思いから、広島らしいと言えば、やはり「お好み焼き」。震災直後の3月17日に生協ひろしまの支援第1陣が支援に訪れた際、「落ち着いたら、是非、お好み焼きを食べてもらおう。」という話からです。その後、日本生協連の「つながろうCO・OPアクション交流会」で知り合った生協ひろしまとコープふくしまの理事さんの交流を通じて、「何かに集中しているときは放射性物質汚染のことを忘れられるのでハギレや手芸用品を送ってほしい」という呼び掛けに応じて、生協ひろしまが組合員から集めた布や手芸用綿、ビーズ毛糸などを贈呈。それをコープふくしまが仮設住宅に配り、各所で手芸教室を開くといった活動を進めました。

「広島お好み焼き隊」に参加した生協ひろしま　理事の上田久子（うえだ・ひさこ）さんは、「初日の大玉仮設住宅で、お渡しした手芸用品が使われた作品を見せていただき感激しました」と声を弾ませます。生協ひろしまが毎年8月6日の前後に行っている「ピースナイター2012（ピースアクションinヒロシマ、オプション企画）」にもコープふくしま、みやぎ生協、いわて生協を通じて被災された方々（24人）を招待。その縁もあって、コープふくしまの理事がお手伝いとして7人参加。生協同士の草の根の交流は続いています。

「広島お好み焼き隊」は業務ではなくボランティアです。同行者を職員に募ったところ、定員を大幅に超える15人の応募がありました。第1陣として広島からトラックを運転してきた生協ひろしま　大野支所　支所長の永井浩治（ながい・こうじ）さんは、震災以来はじめての東北訪問。支援希望は出していたけれどなかなか来られず、今回ようやく念願がかないました。

「正直に言うと『なぜお好み焼きなのか？という疑問はあったのですが、現地でコープふくしまの職員さんや理事さんとお話をして、避難生活を過ごす方々の声を聞くと、放射能との戦いで苦しんでいることがわかりました。『こんな思いをするのは福島だけにしたい。ローソク１本の生活でもいいから原発をなくしたい』。そういう言葉を聞いて『自分たちがその声にどう応えるかを考えるために僕らは派遣されたのだ』と腑に落ちたのです。被災地の実態を広島に戻ってたくさんの人たちに伝えて、自分たちに何ができるかを考えていきたいです」と熱っぽく語ってくれました。

生協ひろしまの 30 事業所が 1 枚ずつ作った「寄せ書きのれん」が、秋風になびく。

生協ひろしまの福島守さんは、被災された方々に広島の文化「お好み焼き」を知っていただくことだけでなく、職員のボランティア精神を育むことも目的の1つにあったと言います。

「自分の目で現地を見ることで、助け

合いの精神、すなわち生協で働くことの意義というものを再確認できると思います。実は僕自身がそうでした。三県の生協さんに受け入れを依頼するなかで、酒井さんをはじめ皆さん一度もお会いしたことがないにもかかわらず、最大限協力してくれました。それは生協という同じ理念をもつ組織で働いているからだと思います」

1,000km 以上の距離を越えて被災地に届けた広島のお好み焼き。その裏には「助け合いと共生」を掲げる生協の理念があったようです。